

食文化の研究

—茶の湯の歴史についての一考察—

松 隈 美 紀

Research of gastronomic culture —Consideration of the history of the tea ceremony.—

Miki Matsuguma

(2008年11月28日受理)

1. 緒 言

茶は古い時代から人類の生活と結びついて利用され、それは単に嗜好性飲料としてのみではなく、食用、薬用、あるいは副食の利用などと幅広く生活体系に折り込まれてきた¹⁾。

現在日本茶の産地は、南は鹿児島から北は新潟まで各地に点在しており、産地により茶葉の種類や製法、味わいもさまざまである。

日本における喫茶の風習は栄西が南宋より九州(博多)に茶種を持ち帰って以来、約800年の時代を経た今も日本人の食生活に密着している。

近年、このように古くから日本において、伝統的に飲用されている緑茶に、生活習慣病予防に有効な成分が多く含まれていることが報告されている^{2,3,4)}。また、茶の伝来と博多の茶人については前報^{5,6)}で報告している。

そこで本研究は、日本の文化伝統の中で博多の茶の歴史的背景と文化(食文化)的結びつきについて、食育の一環である食指導のあり方を見出す目的で、茶の湯の歴史について文献検索や現地調査による検討と考察を行った。

2. 茶の湯の歴史

1) 闘茶から侘び茶へ

鎌倉幕府の滅亡(1333年)、建武の新政(1334年)とその崩壊、南北朝対立と目まぐるしく移り変わった14世紀は、血生臭い戦乱が続き、無秩序と混乱に支配された時代であった。しかし、『太平記』第七巻の「千剣破城軍事」の段に長期にわたる包囲戦のつれづれに耐えかねた幕府の軍勢が、連歌や「域

ハ将棋・双六ヲ芸テ日ヲ過シ、域ハ百服茶・褒貶ノ歌合ナンドヲ断テ、夜ヲ明シ日ヲ暮らした」とあり、鎌倉幕府末期以来の動乱に乗じて「下克上した成出者」の武家社会における茶寄合の流行が見受けられる。ことに、1336年(建武三年)足利尊氏が、自らの施政の綱領を表明した『建武式目』の第二条で「或いは茶寄合と号し、或いは連歌会と称し、莫大な賭けに及ぶ風潮が武家社会にある」ことを指摘して、それを堅く禁制している事実から、禁令の対象となるほど茶寄合が武家社会に流行していたことが窺える。この時代の茶寄合は、「茶寄合と号し莫大の賭けに及ぶ」というような闘茶の会であった。「闘茶」とは、数人が一座してそれぞれ数種の茶を順々に試し飲みして、その茶の産地や銘柄を味わい分け、賞品つまりこの時代でいう懸物を賭けて、その適中率を競う遊戯である。闘茶の魅力は、勝負に伴うスリルと得られる賞品にあったと思われる。懸物は頭人(主催者)や亭主が用意する場合と、会衆がそれぞれ持ち寄る場合とがあり、その種類質などは会衆の富程度に応じて雑多で、香炉・硯・紙・扇子・踏や足駄など比較的つつましいものが多かったが、銭が賭けられることもあった。ことに守護大名たちの茶寄合の懸物は「基ノ費、幾千万ゾ」といわれたように、莫大なもの、豪華なものであったらしい。とにかく、この時代においては公家、武家、庶民をとらず、各階層にわたってギャンブル全盛期であった。闘茶の会もまた、新種の高尚でモダンなギャンブルの一種として迎えられ、大流行したというのが実情ではないかと思われる。また、この時代の上層武家社会で行われた闘茶の会では、茶事の終わった後は酒宴となり、歌舞管弦に興じたり博奕をして遊ぶのが常で、粗放な物質主義と富力を誇示する意欲とに

根ざした派手なものであった。なぜ上層武家社会でそれほどまでに闘茶が発達したかという理由については、おそらく下克上によって成り上がった無教養な「にわか大名」たちが、洗練された古い文化・伝統を持つ公家や社寺などの旧勢力に対する劣等感を払いのけ、優越感を味わうために公家文化になかった新しい文化、すなわち濃厚な異国趣味で買かれた茶寄合をもてはやしたことと考えられる。

この闘茶も、足利義教の頃に起こった書院の茶により下火になっていった。書院の茶とは、この頃から発生した書院造りの座敷で、台子の点前（台子とは、茶道具の棚物の一つで、風炉、釜、水指などの一式を飾るもので、点前とは、茶道でお茶をたてる作法の事）で行われた「格式法儀の厳重」な茶会である。闘茶にみられたギャンブル的な遊戯性や酒宴乱舞などの猥雑性はなくなり、心静かに茶を風味し、芸術品を鑑賞し、風雅の世界に遊ぶことを意図したもので、闘茶よりはるかに洗練されたものだった。しかし、後の四畳半の「わび茶」に比べればまだ、舶来趣味が濃厚で、亭主の富力と教養とを誇示する意欲の強いものであった。

室町中期になると喫茶は、身分的にも地域的にも大いに普及し定着していった。北山時代から東山時代（1436～1490年）にかけて活躍した禅僧歌人、清厳正徹の歌論書『正徹物語』では、「茶数寄・茶飲み・茶くらひ」という茶人の三つのタイプについて述べてある「茶数寄」とは、「茶の具足をきれいにし建蓋・天目・茶釜・水差などの色々の茶の道具を心の及ぶほどにたしなみ持ちたる人」つまり、唐物の名物茶器を多く所持している茶人のこと。次に「茶飲み」というのは、「別して茶の具をば、いわず、いづくにても十服茶などをよく吞みて……前山名金吾（時緊）などの様に飲みしる」人、すなわち闘茶やきき茶の名手である。これに対して「茶くらひ」とは、「大茶碗にてひくつにても、吉き茶にても、茶といえは吞みぬて更に茶の善悪をも知らざる者」のことで、茶をたしなんだ大衆の多くはこのタイプに入れられたということである。この茶くらの出現は、この時代の茶の大衆化と庶民階層での喫茶の流行を物語っている。東山時代に入り、この喫茶の流行と大衆化の地盤の上に、それまでの様々な喫茶方式の良い所を探り、悪い所を流して総合した新しい喫茶方式を始めたのが村田珠光（1422～1502年）である。珠光についての確実な経歴は、彼が活躍したといわれている室町中期の根本史料に、彼に関する記載が一片もないため定かではない。しかし、『山上宗二記』や『南方録』、『茶事談』などの後世の史料によって、珠光が庶民階層から出

て、能阿弥^{のうあみ}について書院の茶の秘伝を受け、一休宗純（1394～1481年）に参禅して禅旨を体得したという略歴を知ることができる。珠光の茶において特筆すべきことは、珠光が四畳半の独立の茶室、あるいは茶事専用の小座敷を設けたということである。最も、依然として書院の茶の名残を留めた濃厚な舶来趣味や貴族趣味を基調としてはいたが、着実に和様化が進められたと考えられる。この四畳半の茶室の出現は座敷飾りの簡素化をもたらしただけでなく、茶会の人数をはなはだしく制限する結果となった。これにより茶の湯はささやかな協同社会に担われる和合団樂の芸術の方向へ推し進められ、反面封鎖性も強まっていったが、それにより一座の和合同心の心の思いはかえって深められたと考えられる。また、珠光の茶は、点茶の方式も「格式法儀の厳重」な台子点前をやわらげ、形式主義を乗り越えた自由なものであったらしいことが窺える。さらに、珠光が愛用し、あるいは目利きした茶道具は、舶来品の唐物であったが、いわゆる上手物の部類に属するもので、粗相で野趣に富み形も端正ではなく、ゆがみのあるものであった。その意味では、唐物ながらもわびた趣のものだったといえる。これは珠光が完全な肯定美よりも不完全な否定美に憧れたためと考えられる。茶の湯の最高理念である「わび」を珠光が自覚的に挙揚していたわけではないが、その動向はすでに珠光において芽生え、ある程度実践されていたということから、珠光によって「わび茶」が開かれたと言えるだろう。このようにわび茶の成立には多くの背景がある。まず、珠光が一休宗純を通じて体得した禅の影響である。次に、鎌倉時代以来の幽玄、あるいは有心といった民族的美意識の伝統である。この美意識は室町時代、能楽や連歌などにより一段と洗練され、この時代の文化の中心となったものである。さらに、応仁の乱によって呼び覚まされた「無常観」を都の焼け跡に残った石や苔などの「不易の美」に発見したのであった。

珠光没後、彼の開いたわび茶は多くの門弟に相承され、時代の流れにのって、京都、奈良、境などを中心に各階層に流行するようになった。そして珠光の後継者となった宗珠をはじめ、多くの茶人たちの創意・工夫によってわび茶は技術的に洗練され、思想的にも深められていった。

2) 侘び茶と千利休

その珠光によって開かれたわび茶を大成した人として、千利休が茶道の歴史の中で占める位置は大きい。

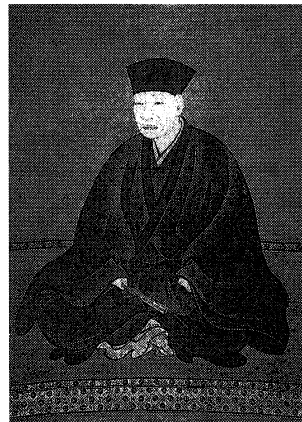
千利休は、1522年（大永二年）に魚問屋田中与

兵衛の長男として境の今市町に生まれ、初め与四郎といった。千氏という姓は利休の祖父が田中千阿彌せんあみと言ったことから与兵衛が千阿彌の一字をとって称したものである。利休がいつ頃から茶を学んだかは諸説あるが、「松屋会記」によると1537年（天文六年）三月十三日、すでに茶会を催していることから、16歳の頃にはすでに一人前の茶人であったことが分かる。誰について茶を学んだかは大きな問題であるが、「南方録」によると最初の師匠は空海の弟子にあたる能阿彌流の境の茶人、北向道陳きたむきどうちんであったという。利休は初め道陳に師事して書院・台子の茶儀を習った。ついで道陳の紹介で武野紹鷗

に入門し、草庵の小座敷での茶法を学んだが、師匠と相談してついにその方法を大成したという。利休が紹鷗に師事したのは1540年（天文九年）であり、紹鷗39歳、利休19歳の時であったといわれる。この年、父与兵衛が病死、利休は魚屋千家の主となり、茶の道に精進する決意を固めたものと思われる。紹鷗に入門を許された時、利休は京都大徳寺に入り、髪をそり茶会当日僧形で参列したという。宗易という茶名もおそらくこの時、戒めを受けた大徳寺の笑嶺しょうりやう宗訢によって命名されたものであろうといわれている。（図1）



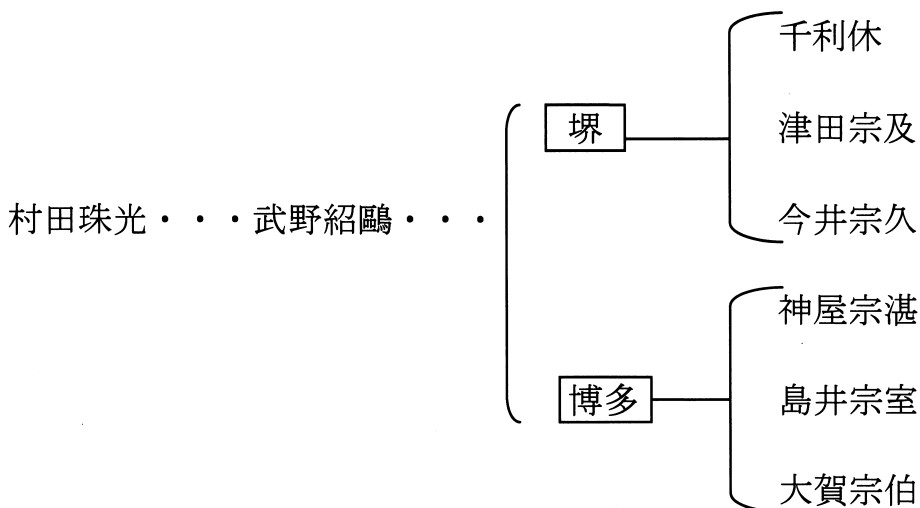
武野紹鷗



千利休

図1. 武野紹鷗、千利休 茶道大事典より

堺と博多の代表的茶人



利休の師匠であった武野紹鷗は珠光の孫弟子であり、境でも最も傑出した茶人であり、文道、花道、書道はもちろん香、将棋、囲碁など幾多の趣味があり、また連歌や禅の修行も積んでいた。紹鷗は皮革問屋（皮革問屋とは、動物などの皮をなめす商いの事）を営む富豪で、多くの名物、名器を秘蔵していたという。

この時代町人の文化欲求は高まり、茶の湯は書物、文字の必要がなく、食味はあるし、道具があつて目が楽しい、馴染みやすい教養の一つとして流行していた。富力を誇る境の町人たちは、舶来の名物、茶器を手に入れやすい立場であり、それらの名物を用いた茶会が盛んであった。茶会は客が3～4人が精一杯の少人数のもので、それゆえ名物鑑賞も十分にできたというわけである。

16世紀後半になって、それまで町人天下であった境の町にも武士の出入りが激しくなると、これらの名物は相手の歓心をこうための手段としても使われるようになった。境の豪商今井宗久が松島（葉茶壺）と紹鷗茄子（茶入）を信長に献じたのも忠誠のしるしとして名物を献進した例である。大名の間でも降伏の際には名物の進献がなされ、戦国の世を治めた信長の下には多くの名物が集められた。信長は茶の湯に熱心で、権力をかさに、名物集めをおこなった。これが俗に言う名物狩りである。彼は論功行賞に茶器を与えたので「上の好む所、下にこれに倣う」で信長の下に諸将らの「茶の湯」の熱は大変なものであり、その最たる一人が信長のあとに天下をとった秀吉であった。

秀吉の茶の湯への執心は、彼の生い立ちと教養の乏しさを粉飾し、その権勢と富力を誇示し、且つ文化的なものに接触したいという内面的心情に支えられ、覇者としての地位の確立につれ、いよいよ高まっていた。そしてこの豪奢な道具茶の傾向が強かった秀吉の茶を適度に操縦して、わび茶へと導いたのが利休である。利休は信長の頃すでに茶堂となっていたが、その序列は居間宗久や津田宗及の下であった。しかし、秀吉の時代になると信長派の代表であった宗久の影はうすれ、門下の先輩である宗及をしのぐほどに利休の茶堂としての地位はたかまっていた。利休の地位は、1575年（天正十三年）十月七日に行われた秀吉の禁中の茶会で決定的なものとなった。1584年（天正十二年）織田信雄・徳川家康の軍と長久手・小牧で戦って和し、覇権を確立した秀吉は1585年（天正十三年）七月に関白に任ぜられ、勅旨により藤原の姓を賜った。そこで秀吉は、越中の佐々氏を征討した後、十月七日に禁中の小御所に参上して茶会を催し、正親町天皇や陽光院誠仁

親王らに茶を献ずることにした。その時、点茶は自らがあたるにしても後見の必要を感じた秀吉は、宗易（利休）を後見に選り禁中に同道することにした。しかし、境町人で無位無官の宗易を宮中に参内させることは許されることではなかった。そこで宗易を得度させて世俗の身分を超越させるという工夫がなされた。宇野主水の書いた『顕如上人貝塚御座所日記』の天正十三年十月七日の条に「京都ニハ秀吉公申沙汰ニ禁中ニ御茶湯アリ、基例ナシト雖モ当時秀吉公此道御執心の故ナリ。宗易ヲ利休居士ニナサレ禁中小御所ニテ御茶タツルナリ。御前ノ御茶ハ秀吉公タテラル。」とあり、宗易がこの時「利休」という居士号を勅賜のかたちで、授けられたことがわかる。この勅命によって利休居士の号を選んだのだが、宗易と親交のあった大徳寺の古溪宗陳であったというが、これによって天下一の茶の湯者として利休の地位が公認されたといえるだろう。この時、利休64歳であった。自らの実力と秀吉の寵辱を背景に、天下一の茶匠として茶の世界における利休の権威は非常なものであった。しかも茶室では政治・軍事の機密事項も相談され、もともと現実的関心の強い利休はそれらの機密にも通じ、「宗易ならでは、関白様へ一言も申上げる人なし」と言われるほどであった。「太閤記」によると利休は秀吉から三千石の知行を与えられていたという。しかし、これほどまでに秀吉に重用されていた利休も秀吉によって切腹を命じられて1591年（天正十九年）二月二十八日70歳の生涯を閉じた。切腹を命じられた原因については、内面的、外面的に様々な見方ができる。外面的原因の一つに、利休の娘（お吟）、万代屋宗女の後家を秀吉が所望したにもかかわらず利休が断ったこと。また、利休が私財で大徳寺の山門を建立し、そこに自らの木像をあげるという不遜横上の行為があったことなどが挙げられる。加えて、利休は秀吉の御茶頭として書院や広間の茶を担当し、北野大茶会を企画するだけの幅をもってはいたが、彼が本質的に志向した茶は、あくまでも「わび」であった。ところが、秀吉の茶には精神的なわびに志向する傾向と、物質的豪華さを志向する傾向との両面があり、むしろ後者の方が優越していたと考えられる。この二人の志向する世界のずれ、さらに芸術をも政治的権力のもとに屈服させようとする秀吉の征服欲と、茶の世界では、いかなる世俗的権威にも屈しないとする利休の信念との内政的な対立などが内面的原因として挙げられるのではないだろうか。

3) 千利休と南方録

利休の言葉や教えといわれるものを伝えるわずか

な史料の中で、「南方録」は数巻きの体裁をなし、利休の弟子である南方宗啓が師伝を書留め、一々その閲覧を求めたものであり、巻末に利休の奥書もあるところから長い間、聖典視されてきた。近年、原典批判の研究が進むにつれ、南方宗啓の聴書きという肝腎の原本が伝わってないため、その成立や発見の過程において疑問点が多いことが問題とされているが、それでもなお利休の茶を研究する上で、最も重要な資料であることに変わりはないとされている。

南方宗啓は初め宗慶といい、堺の茶道と縁のある商家から出て、帰依していた大徳寺真珠庵に修行し、堺の禅通寺に住み、茶を好み、茶を通じて利休を知り合うようになったという。彼の書いた原本は竹軸にしふ紙の巻物であったといわれるが、現在博多円覚寺に保存されている立花実山の書写による南方録は、冊子本となっている。南方宗啓は文禄二年二月二十八日の利休の三回忌を終えた後、行方不明となり、その没年については明らかではないが、古くからの説として京都大原に一生を終わったとも、筑前に渡ったとも言われている。

彼によって書かれた巻物も人に知られることなく埋没していたらしい。ところが、利休没後百年ほど経って、筑前の実山立花五郎左衛門（立花実山）によって、世に出されることになった。

実山の手に渡るまでのいきさつは、次の通りである。（実山自著岐路辨疑による）「貞享三年丙寅秋、筑前福岡城主黒田光之江戸に下る。其の臣衣斐了義、立花五郎左衛門号実山及び茶道三谷古斎等、之れに従ひ、途山城伏見に至り逗留時、京都の某南方宗啓の遺書五巻を蔵すると聞き、人を介して其の閲覧を請ひたり、又其の謄寫を人に託し置きて去れり、翌年正月其の謄本江戸櫻田の藩邸に達す。其の夜了義古斎偕に実山の寓に会い、徹宵熟読せり。乃ち披きて之れを閲すれば、毎巻利休の奥書あり。且つ頗る奥密の茶論を載せたり是より三人偕に研究せんと謀りしも、了義古斎皆公務に忙しく、実山のみ此乃研究に従事することとなり。

以来実山専ら此の書を玩索して、其の蘊底を盡さんとす。……是より力を竭して、宗啓の遺類血族を搜索し、遂に宗啓血族の裔、納屋宗雪と称する隠者の堺に住することを探知したり。

元禄三年庚午正月、実山また光之に従ひ江戸に下る。途大坂に至る。偶々光之の微恙あり、留めること数日なり。実山乃ち彼の宗雪を己の旅館に招き、同月二十二日之れに会見し、宗啓の遺物数種を見、内七種を購ひたり。且つ其の蔵品中二つの巻物あり、執りて之れを閲すれば、即ち宗啓の自著にして、先

年伏見に見たる五巻と同様の装丁なり。……是に於て宗啓の遺著始めて完備した七巻の者となれり。但し此の書題號なし。実山此れを携へ歸りて後、筑前崇福寺の住僧古外に謀り、喫茶南方録と命名せり。」

つまり、九州黒田侯の家臣に立花実山という人がいた。平素、茶湯に関心を向けていた人であつたらしい。貞享三年の秋（今から凡そ270年前 利休没後100年）主君の参勤交代にお伴をして江戸に出府の途中、淀川を通い船で上った。そのときの船に宛てて、京都の人から手紙が届いて『利休秘伝茶湯書五巻』というものを所有する人がある。それを密々で写し取ってあるが若し懇望ならば写し送ろうか」という意味が書いてあつて且つ見本として、その一部を写し取って添えてあつた。実山は非常に不思議な思いをすると共に大いに喜んで、同行の三谷古斎にこれを見せて披読し、伏見に着くと直ちに、その全部をなるべく早く、出来れば今年中に写してほしいと申し込んで置いて、そのまま江戸に出発した。然るに、翌年正月約束通りのものが江戸の邸宅に届いた。実山は古斎ら自邸に招いて、鶏鳴に及ぶまでこれを繙読した。

所を同じく黒田家の家中に、土屋宗俊という人がいて、その家に「利休茶道」という書が大切に伝えられているので実山らは、まず第一にこの両書を比較研究して見ることを忘れなかった。五巻書を得た実山は、それを熟読するうちにこの五巻でまだ何となく物足りないものがあることを看取し、この外に幾何かの残りがあるように思えて仕方がなかったので、更に一層根本的な探索を思い立ち、南方録の筆者宗啓の自坊である集雲庵を一刻も早く訪れたく、志を抱きその機会を狙っていたが、漸く元禄三年閏正月二十一日（貞享三年の後五年）江戸出府の途、大阪において宗啓の遠孫に当たる納屋宗雪が集雲庵にいたということを聞いて、直ちに出向いて、宗雪に対して非常な懇望をしてやっといういろいろの宗啓の遺物を見せてもらった。その中に「滅後巻」、「墨引巻」の二巻があることを知り、それを借覧することができた。これをもって、さきのものと併せて七巻となった。実山はこれを携えて帰り、筑前崇福寺の住僧古外に謀り、「喫茶南方録」と命名した。

以上のように、立花実山は初め土屋宗俊に茶の湯を学んだが、この南方録を発見し研究していくうちに当時の茶の世界が利休の精神を失っていることを嘆いて、自ら利休の茶を復活させようと南方流という一派の茶道を唱え、その門人の優秀な者に対してのみ南方録の書写を許したという。従つてこの南方流は利休の茶の精神を復活させようと博多の町に生

まれて、博多を中心に広まった一流派といえるだろう。この南方流の生みの親ともいえる南方録が納められているお寺は、博多円覚寺である。

南方録は、覚書・會・棚・書院・台子・墨引・滅後の全七巻から成っており、すべての巻末には実山の署名と印がみられる。前途の資料中、実山が最初に手に入れたのが、覚書から台子までの五巻である。第一巻「覚書」は、奥書きによれば南坊が利休の言葉を聞いてその都度書きつけ、そのまま閲覧を請い内容に間違いのないことの証明をもらっているものであり、「家は漏らぬほど、食事は飢えぬほどにて足る事なり、これ仏の教え、茶の湯の本意なり……」などの文章がみられる。第二巻「會」は、利休が主人となった茶会の記録が利休の手もとにあって、それを南坊が借りて抜書きしたものと奥書きにあり、天正九年十月一日から天正十年九月二十九日まで55回の茶会について、茶器は何を使い、誰を客としたかなど詳細に記録している。しかし、この奥書きにはさらに、利休に「右相違無之候、所々口傳にて申事、朱をさし申候、乍序申候、右之會共は年中之毎會之内、品替りたる斗を御書抜事不心得候、面上に御思慮可承候、呉々々相替事なく日々同事斗之内、心の働ハ引替々々何様にも可有候」（本文について間違いありません。所々口伝えに言ったことを書き加えました。ついでに申しますが、右の会はいつも行っている会の中で、ようすの変わっていることばかりを書きぬいてあることがよくありません。お会いして、お考えをお伺いしたいと思います。毎日変わることなく、毎日同じことばかりの中で心の働きがどのようにも変わっていくものですよ）と書かれ、「一期一会」の精神のもとに、南坊が利休に戒めをうけていると考えられる。第三巻の「棚」は、茶の湯に使う棚の由来およびその取り扱いの方式についての留め書きと、52枚の図が示されている。第四巻「書院」は、書院の飾り方についての覚書で、簡単なものではあるがこの奥書きにも利休によって「右一覽申候、書院いか程も品多く候得共、比等之分にて一段事欠申間敷候」（ざっと見ました。書院の品も数多くありますが、一段もかかすことなくきまりのように置きなさい）という添え書きがなされている。第五巻「台子」は、巻頭に台子相伝に関して重々しくその次第を述べた南坊宛ての利休の署名があり、切り紙四十数枚に台子の飾り方が記されている。第六巻の「墨引」には、いわゆる「カネワリ」という秘事が書かれている。「カネワリ」とは、道具の飾りの法則をいったもので、この中で陰と陽の飾りについて図を用いて細かく説明している。これに対し利休は、「巻物六くり返し、くり返し披見申候。

五巻いづれも奥書き判をもいたし進候。此一巻におゐてハ、あまりこまごまに秘事を被書頭候。年月後他見もいかが、秘ハ秘するに依而尊く候。二是非此巻ハ反古可被成候、申も疎に候得共、我等の方にもか様の書神以無之候間、留候て、子供にも伝度様二存候得共、いかにしても秘事沸底二及候。とにかくに丙丁童子かものに可被成候 かしこ 十二月五日 宗易

集雲菴

まいらせ候

と書き記している。つまり、他の五巻には奥書きも印もしたがこの巻は、茶の極意に達した者だけが知っていればよい秘事を余りに詳細に書いてあるので、内容に間違いはないのだが、直ちに焼き捨てなさいという内容であるらしい。「丙丁」というのは、五行の火を示し「焼却せよ」という意味である。「五行」とは、中国でおこった東洋易学にみられるもので、五行思想とは、天地自然の万物は木・火・土・金・水の五つの気からなるという考え方をいいます。「丙丁」は、日本において十干十二支の中で、火の象を現わすものとして「ひのえ、ひのと」と別読されます。また利休は、墨を引いてこれを返したので、「墨引」という名が付けられたという。しかし、南坊は次のようにこの最後を書いて焼くことをやめている。「如右此巻物には奥書きもなく墨引て文を添えて被申事なれば速に焼却せんと思共、此坊物忘のみ多年相傳え事共も無程忘果候事口惜く、可他見物ならねば、師の命を恐れながらづだの中に打入置て、独見之一巻とす。真に大秘之奥秘也。」要約すれば、利休の言いつけ通り焼こうと思ったが、最近物忘れもひどいので、せっかくの教えを忘れたらくやしい。そこで、人に見せないようにしてとっておこうということになる。第七巻「滅後」は、利休の死後その三回忌までに南坊が利休を懐かしみ、利休の生存中のことを思いおこして他の巻に漏れたことなどを書き連ねたものである。この巻の終わりには次のような利休を懐かしむ漢詩が見られ、また南坊の割印が押されている。

この南方録の最後のページには、すべて実山の「本録校合相違なきものなり」という確認の文章と、署名、押印がみられる。これら南方録全七巻は、大切に木箱にいれられて円覚寺に保管されていた。（図2）

3. まとめ

わが国の茶祖としても知られ、仏法の求道者として苦難の一生を過ごした栄西禪師が、博多に持ち

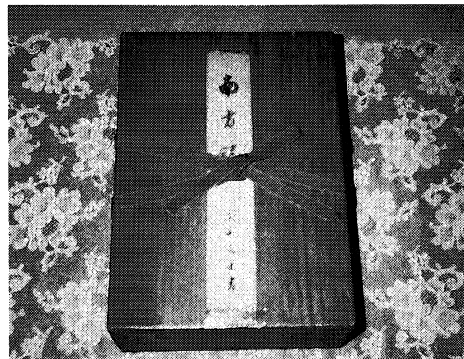
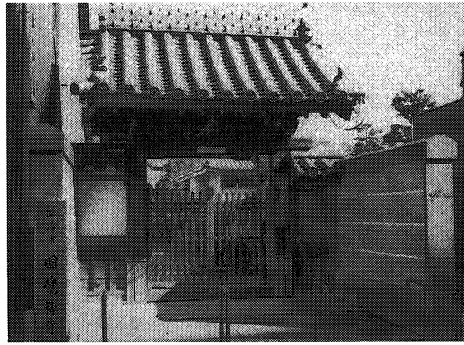


図2. 円覚寺, 南方録全七巻(円覚寺所蔵)より
右から覚書, 会, 棚, 書院, 台子, 墨引, 減後

帰ったとされる茶は、京都梅尾の明恵上人に渡し、梅尾の茶は日本の茶の中心となり、室町時代、闘茶が盛んになるにつれ一層重要視されることになる。また、博多の茶人と言われた神屋宗湛、島井宗室らは、堅実な人生観と世界観を持ち、その時代の中で新しい何かを見出し、次の世代に伝えていかなければならないという気概を感じる豪商達であった。このように博多と茶道とが歴史的に深い関わりをもっていることを知るに至り、もともと禅と結びつ

いて精神的修行を兼ねた芸術である茶の湯が、茶道として私たちの周囲でお稽古事の一つとして「お茶の先生」という職業により、変化してきている現在、博多に残された史跡などの保存についても考えていく必要があると思われた。

文 献

- 1) 前田昭子ら：抹茶の起泡性におよぼす

NaCl, CaCl₂, MgCl₂, 脂質の影響, 日本家政学会誌, 49, 633-636 (1998)

2) 島田和子: 緑茶浸出液中の茶葉サポニンと水溶性ペクチンの分析, 日本家政学会誌, 54, 957-962 (2003)

3) 杉澤彩子ら: X線照射により誘発した染色体損傷に対する茶カテキンの抑制効果, 日本栄養・食糧学会誌, 56, 85-90 (2003)

4) 曾我部夏子ら: 抹茶が小腸アルカリフォスファターゼ活性に及ぼす影響について, 日本家政学会誌, 57, 215-220 (2006)

5) 松隈美紀: 茶の伝来と博多における茶についての一考察, 中村学園大学・中村学園大学短期大学部紀要, 第 39, 119-129, (2007)

6) 松隈美紀: 茶の伝来と博多における茶についての一考察, 中村学園大学・中村学園大学短期大学部紀要, 第 40, 91-99, (2008)

7) 筑紫 豊: 博多と茶湯, 文献出版

8) 桑田忠親編: 茶道辞典

9) 桑田 忠親: 日本茶道史, 河原書店

10) 井口海仙ら: 茶道辞典 再販, 淡交社

11) 木下桂風: 喫茶史談

12) 林屋辰三郎ら: 日本の茶書 1, 平凡社

13) 村井康彦: 茶の湯人物史

14) 若原英一共著: 茶道文化選書 日本の茶—歴史と文化一, 淡交社

15) 熊倉功夫: 茶の湯入門

16) 熊倉功夫: 茶の湯の歴史, 朝日選書

17) 中村利則ら: 史料による茶の湯の歴史 (上), 主婦の友社

18) 千宗左, 千宗室ら: 新修 茶道全集 巻八 文献編, 創元社

19) 千宗室監修, 村井康彦: 茶道史, 淡交社

20) 酒井欣: 日本の遊戯史, 拓石堂出版

21) 千宗室監修, 谷端昭夫: 茶道の歴史, 淡交社

22) 唐木順三: 千利休

23) 千原弘臣: 千利休の年譜

24) 三浦綾子: 利休とその妻たち

25) 成川武夫: 千利休 茶の美学